

パソコンオタクの なんちゃって哲学

太田 富英〈とみっぺ〉

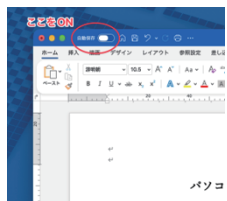
No.50 スクリーンショットはパソコンのいち器官とすら言えると思う

スクリーンショット（スクショ）と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。スマホの画面を撮っておくこと。何かの証拠や、ちょっとしたメモ。間違いではない。しかし、そのイメージが昔のままなら、ずいぶん損をしているかもしれない。名前も基本の操作も変わらないうちに、スクショは別の力を身につけた。ここはスクショで済むという場面でも、それを思いつかない人が案外多い。

って哲学
とすら言える

スクショの仕組みは今も昔も同じで、画面に映ったものを、その画素数で残すものである。元の資料にどれほど細かい情報があっても、表示された以上の細かさでは保存できない。小さな文字を後から拡大すれば、粗さまで大きくなる。かつてのパソコン環境では、スクショを素材として使うためには、まず資料を大きく表示してから撮る。すると全体が入らず、スクロールして何枚も撮ったり、つないだりしなければならぬ。全体を取れば細部を失い、細部を取れば全体を失う。画面の粗さが、使い道の上限だった。

この制約を変えたのが、画面の高精細化である。2010年に登場したiPhoneのRetina(レティナ)ディスプレイは、同じ大きさの文字を、より多くの画素で描いた。ただ、スマホはいかんせん画面が狭い。まとまった情報を残すには、やはり何枚も撮影が必要だった。その後、Macの画面も高精細になり、広さと細かさが両立する。普段の表示をそのまま撮っても、使える素材になる。僕が接するWindows環境でも、ここ5、6年で、その恩恵を感じる場面が増えた。画面だけでなく、OSやアプリ側の対応も必要だったのである。



今のスクショは、メモとしても豊かだ。拡大して細部を確認できるし、必要な部分を切り抜けば、資料に使う画像や小さなアイコンの素材にもなる。「スクショだから使い物にならない」という前提は、もう古い。ホームボタンのないiPhoneなら、サイドボタンと音量を上げるボタンを同時に押して放せば撮れる。ことPCでは、全画面を撮る必要はない。WindowsならWindows+Shift+S、MacならCommand+Shift+4を押して、欲しい範囲をドラッグする。範囲を絞れば、伝えたいことにフォーカスできる。

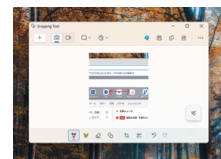
さらに、高精細化と文字認識精度の劇的な向上とが相まって、画像の中の文字もノーストレスで取り出せるようになった。たとえばMacの写真アプリでは、画像の文字をそのまま選んでコピーできる。文字情報を持つPDFのようである。昔なら「画像だから打ち直すしかない」と諦めたものが、今は文章として使える。文字だけコピーすると失われる配置や図、色、周囲との関係を見た目ごとに残し、そのうえで文字も取り出す。これは単なる写真というより、見た目も付いた情報の完全体である。

注釈も大きい。丸で囲み、矢印や一言を足せば、画面だけでなく、撮ったときの着眼点までも残る。2011年頃にリリースされたSkitch(スキッチ)は、撮る、書き込む、渡すが一続きになり、スクショを意図を伝え

る道具に変えた立役者だ。今はWindows、Mac、iPhoneの標準機能でも注釈を付けられる。僕は専用アプリのCleanShot (クリーンショット)Xを使っている。かつて、一旦保存したものをペイントで開いて、ビットマップ?? と嘆いていたのが甘酸っぱい思い出である。

もう一つの変化が、画面録画だ。静止画では結果しか見えないことも、動画なら、何を押してどう変わったかまで記録できる。録画自体は以前からできたが、Macでは動画プレーヤーのQuickTimeを開いて画面を録画しなければならなかった。Windowsにもゲームバーという入口があったが、ゲーム以外でも録画できた。いずれもおおよそ直感的とはいえない場所にその機能は配置されていた。機能が存在することと、使い道がすぐ理解できることは違うし、そこが成立しないと、実際になかなか便利さが認知されない。Macでは2018年、Windows 11でも2023年、スクショ操作に録画が並んだ。「画面を撮る」という一つの行為の中で、写真か動画かを選べる。入口の置き場所が変わるだけで、道具の意味まで変わるのである。

ざりとて、スクショや画面録画は、それ自体が目的にはなりにくい脇役だ。何かを記録・保存したい、誰かに説明したいときにだけ出番が来る。だから能力が増しても、それを知る機会がないまま、昔の使い方が続く。画面をカメラで撮る人もいれば、操作を長い文章で説明する人もまだまだおられる。進化の速度に、使い手の着想が追いついていない感じがする。



家への道案内で、3つ目の電柱を左へ、赤い看板を右へ、と延々説明するより、住所や地図を送れば話は早い。同様に、画面の様子はスクショで、操作の流れは録画で渡せばよい。AIとサイトやアプリを作るときも、ボタンを囲んで「ここを右へ」とスクショを渡す。言葉で説明するより修正の意図が早く、確かに伝わる。

スクショと画面録画はもはやパソコンの追加器官とも言えるし、これらを使える人間の側は、ひとつ別の言語を話せることに近い。撮る、書き足す、見た目と文字情報を同時に伝える。そんな凄さを意識して、一度味わってみたい。だいたい。



プロフィール

太田 富英 (おたとみひで)
香川県高松市在住。スタジオとみっぺ代表
(<http://tomippe.jp/>)
香川県立農業大学校非常勤講師 (情報処理)。パソコンサポート、Webサイト制作等の事業を営む。スندゥップとフォントと時刻表とカラオケが大好き。音楽は20年来のスピッツファン。お客様のつながりで2003年ごろ短歌を始める。今月の一首「特別の上の名前も出来兼ねぬ特別警報あまりに多く」●○ 現在、AIでリメイク・作曲したものを "radio Camnet" JET STREETに取り上げていただいています。ぜひお聴き下さい。○●